

「迷い」や「空虚感」が出発点となり、  
その才能を次々と開花させた

## 片岡鶴太郎氏

俳優・画家



『片岡鶴太郎画集14  
墨戲彩花』(近代映画社)

### TSURUTARO KATAOKA

高校を卒業と同時に片岡鶴八氏に師事。3年後独り立ちし、東宝名人会、浅草演芸場に出演。23歳の頃からテレビに進出し、フジテレビ系『オレたちひょうきん族』で人気を博す。その後、ドラマの分野も開拓。33歳のとき、プロボクシングライセンスを取得。その時期に出演した初の映画、松竹『異人たちの夏』が話題を呼び、映画賞、各賞を受賞、役者としての地位も確立。墨彩画に魅せられ、絵を描き始め、1995年12月には初の個展、98年12月には草津に「草津片岡鶴太郎美術館」を創設するなど画家としても活躍。

## CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 大久保幸夫、入倉由理子  
Text = 入倉由理子 (58~60P)  
大久保幸夫 (61P)  
Photo = 刑部友康

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

芸人、俳優、画家、プロボクサー。片岡鶴太郎氏の「肩書き」を、私たちは4つ知っている。芸人として大ブレイクした片岡氏だが、特に俳優、画家という職業においては、いわゆる「本業」である芸人を凌駕するほど、それぞれの分野であまりにも高い評価を得ている。片岡氏の場合、「マルチタレント」という言葉はまったく似つかわしくないのである。彼はいかにしてそれらの専門性を身に付け、高めるに至ったのだろうか。

## 片岡鶴太郎氏 キャリアストーリー

1954年	0歳	東京都荒川区西日暮里に生まれる
1964年	10歳	フジテレビ系の素人参加番組「しろくと寄席」に出演。すでに芸人や俳優に強く興味を持っていた
1969年	14歳	中学3年生の夏休みに1カ月間猛勉強し、それまで下から2、3番目だった成績を上位10位にまで上げる
1973年	18歳	東京都立竹台高校では演劇部に所属。卒業後、声帯模写の片岡鶴八氏に弟子入り。その後、声帯模写で東宝名人会や浅草松竹演芸場などの舞台に出演。一時、地方の温泉旅館で司会やものまねをしていた時期もある
1977年	23歳	東京に戻り、テレビに出演し始める。『オレたちひょうきん族』でブレイク。近藤真彦氏、九官鳥の「キューちゃん」や「小森のおばちゃん」などのものまねで人気を博す
1986年	32歳	「ブッスン」で流行語大賞を受賞。バラエティ番組の司会をこなすなど、レギュラー番組を多く抱える多忙な日々を送る
1988年	33歳	「自分が嫌になって、変わりがかった」という理由で、プロボクサーテストを受け、合格。体型もシャープに変化。鬼塚勝也氏や畑山隆則氏のマネージャーとして、タイトルマッチではセコンドを務める この時期を境に、俳優としても脚光を浴びる。映画『異人たちの夏』では数多くの賞を受賞
1993年	38歳	墨彩画を描き始める。画家として高い評価を得て、1995年より毎年画集を出版。群馬県吾妻郡草津町、福島県福島市に美術館、石川県加賀市、佐賀県伊万里市に工芸館がある。2004年には、青森大学で芸術論を担当。03年、奈良県當麻寺中之坊に天井画を揮毫し奉納。07年には第24回産経国際書展で、作品「骨」が産経新聞社賞を受賞している

## 中学校3年次、猛勉強して成績がアップ 「やればできる」という言葉が今の礎に

芸能界に対する興味は、幼少時から持っていた。「芸人や俳優として舞台に立つ姿を夢見て過ごしていた」と、片岡氏は話す。高校を卒業したら、憧れの芸の世界へ。そんな志を阻もうとしたのは、彼の中学3年次の成績だった。

「芸人になるにしても、せめて高校は卒業したいと思っていました。しかし当時の私の成績は、クラスでも下から2番目か3番目。友人たちの『テスト前に勉強していない』という言葉信じきって、まったく勉強していなかったんですね(笑)。でも、このままでは高校進学は無理。そこで一念発起したんです」

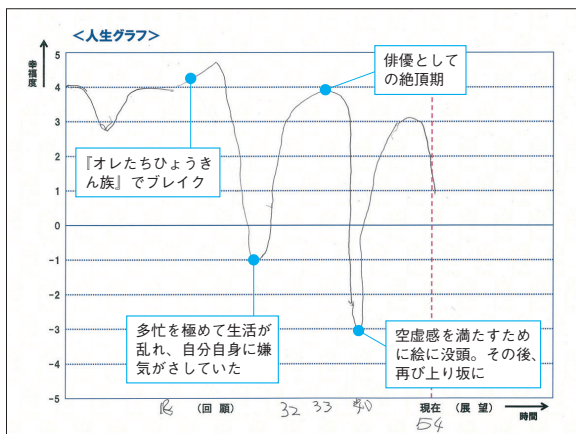
夏休み、イチから勉強し直そうと中学3年用の教科書を開く。しかし、問題の意味すらわからない。そこで中2、中1と戻るが、それでも理解できない。結局、小学校6年の教科書まで立ち戻り、1カ月間、復習に明け暮れた。

「夕方の4時くらいに数学の問題を解き始め、気がつくと朝方の4時ということもしばしばでした。12時間、ぶっ通しで。1問解けると、次は解けるだろうか、次はどうか……と夢中だったんです」

猛勉強は功を奏し、夏休み明け、成績は学年で10番に入るほど、急激にアップした。

「このときの担任の先生の言葉が、胸に残っています。『おまえはバカじゃない。やればできる』と。今でも、私の自信の礎ですね」

晴れて高校に入学し、演劇部に入部。3年次には部長として活躍した。卒業後は声帯模写の片岡鶴八氏に師事し、芸を磨いた。「憧れの世界に身を置いて、テレビでしか見られなかった人々の芸を間近に見て、学べる毎日



直筆の人生グラフ。必死に何かに打ち込み、才能を開花させるが、いつしか空虚感に支配され……この繰り返しが大きな山谷となっている。



が本当に楽しかった」と当時を振り返る。その後、地方の温泉旅館での司会やものまね芸の仕事を経て再び上京。テレビに出演する機会を得て、『オレたちひょうきん族』のものまね芸でブレイクしたのは、ご存じの通りである。

### プロボクサーテストのためにダイエット 心を蝕んでいた自分への嫌悪感もそぎ落とす

バラエティ番組の司会やトーク番組への出演など、活躍の場をどんどん広げた。ピーク時には、週に8本のレギュラーを抱えるなど、多忙な日々を送っていた。

「番組の収録が終わると、その興奮状態をクールダウンするためもあって、毎晩のように飲み歩いでいました。すると、どんどん太っていったんです」

体が変化していく中で、気持ちも沈んでいった。自らが出演した番組の録画を観る。その醜さに愕然とする。目を逸らしたい気持ちを抑え、直視し続けると、「このままではいけない」という思いが湧き上がってきた。

「そんな葛藤の中で、プロボクサーへの挑戦を決めました。当時、小太りの『鶴ちゃん』がキャラクターになっていましたから、周囲の反対もあったし、仕事がなくなるのではないかという不安もありましたが、それでも自分を変えたかったんです」

果たして、プロテストに合格。テスト前年からのダイエットで、心を蝕んでいた自らへの嫌悪感も余分な肉とともにそぎ落とされていった。この後、俳優に活躍の場を広げ、高い評価を得ていく。

テレビドラマのみならず映画にも出演し、数々の賞を受賞した。

### この瞬間の美しさをこの世に留めたい それが絵筆を握るきっかけに

しかし、再び迷いの時期は訪れた。俳優、芸人として充実する日々を送っていたものの、「心に一抹の空虚感があった」と、片岡氏は言う。2月のある日、仕事に向かうために自宅の入口を出ると、隣の家の玄関脇の木に赤い花が一輪、咲いていた。冬枯れた景色の中で強烈な色彩を放つその花に、片岡氏は強く魅入られた。

「隣人にその花の名前を訊くと、『椿ですよ』と笑って言われました。これが椿かと。そんなことも知らないほど生きている世界に無頓着だった自分がおかしくもあり、



また、この瞬間の美しさをこの世に留めることはできないだろうかと思いました」

音楽家であれば曲に、作家であれば文章に、詩人であれば詩にしたためることができる。しかし、片岡氏はその術がない……。そこでふと思いついたのが、「絵」であった。それまで絵筆を握ったことすらなく、また、美術館に足を運んだこともほとんどなかった片岡氏だったが、すぐに文房具店に走り、硯と筆を購入した。これが、絵画を始めたきっかけだった。

絵画の世界でも、脚光を浴びるのにそう時間はかからなかった。経験のなかった演技も、絵画も、常人では考えられないスピードで、片岡氏はその技術や芸術性を自分のものにした。

「『これ』と決めたときの集中力は、中学3年生の夏休みの勉強と同じ。そして、もともとのまね芸人ですから、『演じる』ということに対する壁は低かったし、絵も『いいな』という画家の模倣から入っていった。だから、習得のスピードが速いのかもかもしれません」

俳優、画家、芸人という3本の職業の軸を持つ片岡氏だが、「今、3度目の迷いに入り込んでいる」と取材の最後にもらした。

「もちろん、すべての仕事に充実感はあるけれど、集中して打ち込むような情熱が湧き上がってこない。これからどうするかと、考えあぐねているところです」

プロボクサー、俳優、画家という職業は、片岡氏の「迷い」や「空虚感」が出发点となり、その才能を開花させた。そう考えれば、また、新たな顔、新たな才能を私たちの前に見せてくれる日が近いのかもしれない。

■ 片岡鶴太郎氏のキャリアをこう見る

## 瞬く間にプロになる

### 「集中力」×「ものまね」＝「憑依学習法」

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

片岡鶴太郎氏は、ふつうの人ならば熟達するのに5年、10年かかるところを1年、2年でクリアしてしまう。学びの達人である。

萌芽は中学3年のとき。それまで学年で下から2、3番目だった成績を、夏休み中に小学校6年からやり直す猛勉強をしたことで、学年で10番以内へと躍進した。その集中力に担任の先生は驚嘆し、絶賛したという。

ものまね芸では、小森和子のCMを聞いた直後にまねして、すぐにできるようになった。まねする対象への愛情があれば、ものまねは難しいことではないという。

俳優としての仕事では、その役になりきる。うまくやろうとするのではなく、なりきることが好演につながる。

ボクシングではわずか1年でプロテストに合格するまでに腕を上げたが、これも渡嘉敷勝男、具志堅用高という好きなプロの形を徹底してまねする学習だった。

絵は、中川一政らの絵をまねしながら、棟方志功のようなのめりこみ方で描いていった。

集中力とものまね。この2つが組み合わせると、一種の「憑依」状態となる。あたかも乗り移ったかようになって、その人になりきり、時間を忘れて「型」を取り込んでいく。心理学者チクセントミハイは、「フロー（flow）」という言葉でこのような集中して取り組み、成果を挙げる現象を表現したが、片岡氏も、絵を描いているときに「え!? 誰か時計回した?」と思

うほど集中するという。

その結果、俳優としては日本アカデミー賞最優秀助演男優賞を受賞、ボクシングではプロライセンス合格、絵画では14冊の画集と全国4カ所の美術館・工藝館を持つというように、それぞれの分野で高く評価されるようになったのである。

人生グラフが語るように、彼は今、次の何かを求め始めているようだ。それが何かはまだわからないが、どのような分野にチャレンジするにしても、同じように短期でプロになり、華麗な姿を見せてくれるに違いない。

